
家族はプリキュア

嶋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族はプリキュア

【Nコード】

N3410Z

【作者名】

嶋

【あらすじ】

ピクシブで連載されている小説を移す事にしました。物語はラブとせつなの娘が主役で、ラブとせつなは母親と言う立場で家族を中心に描いた物語です。歴代主役プリキュアはゲストとして出ていきます。

登場人物 1

登場人物 1

桃園ラブノキュアピーチ（36）

かつてはキュアピーチに変身して戦っていた。せつなと一緒に結婚してせつなとの間に同性出産で自分そっくり子供を産んだ。現在は四ツ葉町を離れてせつなと子供と一緒にミッドスターという世界で心星町へ暮らしており、仕事はほぼ彼女が勤めている。プリキュアの力は今でも維持している。

桃園せつなノキュアパッション（36）

元ラビリンズ幹部。かつてはキュアパッションとして戦っていた。ラブと一緒に結婚してラブとの間に同性出産でラブと同じく自分そっくり子供を産んだ。現在はラビリンズを離れてラブと子供と一緒にミッドスターという世界で心星町へ暮らしている。プリキュアの力は今でも維持しており、家事は全部彼女が任せている。名字は桃園と名乗っている。

桃園アイノキュアアップル（14）

イメージCV：戸松遥

ラブとせつなの中で生まれた子供。ラブのお腹から出産した女の子で、元気よく明るい性格で運動、家事の2つを得意としている。勉強が少し苦手な面がある。彼女は運動が抜群で、学校のクラスにおいて1番である。学校ではいつもマコトと一緒に過ごしたりする事が多く、休日は家族と過ごす事が一番多い。

ラブとせつなの二人の母親思いは一番で二人の母親になつく事がある。嫌いな物はにんじん、爬虫類の2つである。プリキュアとしてはキュアアップルに変身する。

掛け声「幸せ掴むんだから！」

桃園マコトノキュアチェリー（14）

イメージCV：豊崎愛生

ラブとせつなの間で生まれた子供。せつなのお腹から出産した女の子で、大人しくて優しい性格でアイと同じように勉強、運動、家事の3つとも得意である。彼女は学校のクラスにおいて運動はアイに次ぐ2番目で、成績はクラスにおいてトップである。学校ではいつもアイと一緒に過ごしたりする事が多く、学校ではいつもマコトと一緒に過ごしたりする事が多く、休日は家族と過ごす事が一番多い。

ラブとせつなの二人の母親思いが一番で二人の母親になつく事がある。嫌いな物はピーマン、オバケの2つである。プリキュアとしてはキュアチェリー変身する。

掛け声「一生懸命負けないくらいやるわ。」

プリキュア1

キュアアップル

アイが二人の母からリンクルンと専用ピッケルンのリルンを渡されて、プリキュアに変身した姿。ピーチと同じ色と髪をしたレモンイエローのツインテールが特徴。イメージカラーは桃色と赤で、服装の色全体が桃色で、細かい部分は赤。少しキュアピーチと似ているところが多い。

必殺技

プリキュア・ラブハート

手をハートの形にして放つ桃色の光線技。キュアピーチの放つプリキュア・ラブサンシャインに似ている。

キュアチェリー

マコトが二人の母からリンクルンと専用ピッケルンのミルンを渡さ

れて、プリキュアに変身した姿。パッションと同じ色と髪をした淡いピンク色となり、腰まで伸びるような長髪が特徴。イメージカラーは桃色と赤で、服装の色全体が赤で、細かい部分は桃色。少しキュアパッションと似ているところが多い。

必殺技

プリキュア・ハピネスハート

手をハートの形にして放つ赤色の光線技。キュアピーチやキュアアツプルと同じ放つ光線技である。またキュアパッションもこの3人と同じ光線技を放つ事が出来る。

キュアピーチ

ラブがピルンの力によって変身するプリキュア。姿はかなり14歳の時と異なっている事で、大人としての姿は髪型やコスチュームが変わっていて、スカートがムーンライトと同じロングスカートを着用してて、足にパッションと同じタイツを着用している。服の色が全体が桃色、細かい部分は赤、白。髪型がツインテールからロングヘアとなっている。これらのコスチュームの変更は大人としてのキュアピーチの姿を表している意味でもある。またパッションと結婚した事によってお互いのピククルンの力を共有して使う事が可能になった。

必殺技

プリキュア・ラブサンシャイン

手をハートの形にして桃色の光線技を放つ。

キュアパッション

せつながアカルの力によって変身するプリキュア。姿はピーチと同様に14歳の時と異なっており、大人としての姿は髪型は14歳のままとは変わらず、コスチュームの方は黒の部分が白、ピンクに

変更されており、アームバンドはピーチと同様短いのに変更されており、スカートはピーチと同じロングスカートを着用している。服の色が全体が赤、細かい部分などは桃色、白。これらのコスチュームの変更は大人としてのキュアパッションの姿を表している意味でもある。またピーチと結婚した事によってお互いのピククルンの力を共有して使う事が可能になった。

必殺技

プリキュア・ハピネスウエーブ

キュアパッションの唯一の光線技。手をハートの形にして赤の光線技を放つ。

合体必殺技

プリキュアファミリーハート

アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアのそれぞれの合体技を同時に繰り出す合体技。

プリキュアクアドラプルパンチ

アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアが4人同時に繰り出すパンチ攻撃。威力は巨大な敵を吹き飛ばすほどの威力を持つ。本来ならベリーとパインと一緒に組んでやる技だが、ピーチとパッションの双子の娘のアップルとチェリーでも一緒に使用する事が可能。

プリキュアクアドラプルキック

アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアが4人同時に繰り出すとび蹴りを放つ技。こちらもプリキュアクアドラプルパンチと同様アップルとチェリーでも一緒に使用する事が可能。

プリキュアコンビネーションキック

アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアが4人が同時に空中から降下しながら 飛び蹴りを繰り出す合体技。こちらもプリキュアクアドラプルパンチやプリキュアクアドラプルキックと同様アップルとチェリーでも一緒に使用する事が可能。母子でも一緒に合体技を使う事が可能。

第1話 私たちプリキュアをはじめます(前書き)

第一話はアイとマコトがプリキュアに変身するお話です。戦闘や敵はまだ次回から出てくるので、1話は日常もので家族との生活や少しだけ学校生活で。

第1話 私たちプリキュアをはじめます

かつて世界を救った二人のプリキュアはお互いに思いやり、愛し合
いながらその二人のプリキュアはやがてお互いに結ばれる事になっ
た。

それから結ばれた二人のプリキュアは、女性同士でありながらそれ
ぞれ母体から命が宿り、そして子が生まれた。生まれてから14年
の歳月が経った。

「ラブ、アイ、マコト、3人とも起きて?。」ラブとその二人に声
をかけるせつな。

「今起きるからまって!。」

「せつなママ、今起きるから。」

「私もアイもラブママも今そっちへ行くから。」その二人からマ
マと呼ばれているのはラブとせつな。ラブとせつなの二人はか
つて伝説の戦士プリキュアとして活躍して世界を救い、今は二人は
結婚して女性同士による同性間出産でそれぞれ子供を出産した。

アイはラブが生んだ子で、元気で明るい14歳の少女。彼女は勉強
はいまいちだが運動や家事などは得意。かつて母ラブと同じプリキ
ュアだったなぎさ(キュアブラック)と咲キュアブルームに似ているところが少
しある。目の瞳や髪の色や性格も14歳の頃のラブにそっくりなと
ころがある。

マコトはせつなが生んだ子で、大人しくて優しい14歳の少女。

彼女は勉強や運動や家事が全部得意。かつて母せつなと同じプリキ
ユアだったほのか（キュアホワイト）と舞キュアイーグレットに似ているところが少し
ある。目の瞳や髪の色も性格も14歳だった頃のせつなにそっくり
なところがある。

それから朝を起きて3人はせつなの作った朝食を食べる事になった。

「いただきます！」二人の母親と二人の子供と4人一緒に朝食を食
べながら楽しそうに送っていた。

「せつなのがいつも作っている朝食はおいしいわ。」

「あらラブ、ありがとう。」せつなはラブの頬に唇を優しく近づけ
た。

「ラブの事をいつでも愛しているわ？」唇を近づけた後、ラブにそ
う告げた。

「わあ？、せつなママ、ラブママだけにチュウするなんてずるい？。」

「ねえせつなママ、私やアイにもほっぺにチュウして。」二人の娘
も母せつなにもう一人の母ラブみたいにチュウして欲しいと求めて
きた。

「アイやマコトにも今からせつなママのチュウしてあげるわ？」ア
イヤマコトの二人の娘にもそれぞれの頬に唇に近づけた。

「せつなママはラブママもアイもマコトの事を愛しているわ。」

「あたしも二人のママの事大好きよ。」

「私は二人のママが大好き。」

「アイもマコトも大好きって言っちゃって、もう？」アイやマコトに抱きついていて二人の顔に近づけてすり寄るラブ。朝食が終わって、家を出てラブは仕事に、アイとマコトは学校へ行った。学校で二人は同じくクラスでありながら、学校での生活を送っていた。

「アイ、マコト、おはよう。」

「由樹もおはよう。」由樹は二人の同じクラスの同級生。

「二人ともいつも一緒に学校に通っているわね。」

「うん、あたし達双子だからいつも一緒よ。」

「双子わりにはアイは運動が得意でも勉強とかいまいちでしょ。」

「それ言わないで?。」

「アイったら少しなぎささんに似ているところがあるわね。」明るい学校生活をいつもながら不公平な事なく送る二人。時間が経ち、ようやく放課後に学校から下校して自宅へ帰宅した二人。

「ただいまー。」

「二人ともおかえり。」家から帰ってきた二人の娘を笑顔で出迎えた。夕食はいつもせつなが作っているんだが、今日はラブが仕事が早く終えたから今日の夕食はラブと一緒に作る事になった。

「今日の夕食はダブルママの特製ハンバーグと野菜炒めとカボチャのスープよ。」今夜の夕食は二人が作ったハンバーグと野菜炒めとカボチャのスープであった。特にハンバーグはラブが14歳の時によく作った事があり、せつなも桃園家にいた頃はラブの母あゆみからいろいろと料理を教わったり、学んだりして、彼女も今は母親として大事な我が子達に食べさせる料理など作れるようになっていた。

「ええー、あたしの嫌いなにんじんがある！」

「私、ピーマンは無理……。」

「二人とも好き嫌い言わないで食べなさい。」

「はい。」夕食を食べ始める4人。野菜炒めを口に加えようとしている二人の娘の姿を見る二人の母親。

「何か、昔の事を思い出しちゃっわ。」

「私やラブも14歳の頃は好き嫌いがあったから。」

「にんじん食べるのがどれだけ苦手だったか思い出すわ。」

「子供達の前にかっこわるいところを見せるわけにもいかないからちゃんと嫌いな物を克服するのに大変だったわ。」昔、まだ14歳だった頃自分たち二人にも苦手な物があった事を思い出し、大人になってきてからは苦手な物を克服するようになってきて、嫌いな物を食べれるようにしないと買ったラブとせつな。それから食事が終えたらアイとマコトは二人の母親に呼ばれて、部屋へ入室した。

「ラブママ、せつなママ、どうして呼んだの？」

「あなたたち二人に渡したい物があるのよ。」

「渡したい物？」

「うふふ、二人がママの持っているあれと同じよ。」「アイとマコトに自分たち二人が持っている物と同じ物を見せた。」

「これって、もしかして？」

「ママ達がプリキュアに変身する時に使うリンクルン？」

「当たり前〜！」「アイとマコトはラブから渡されたのはラブとせつなが持っているリンクルンだった。」

「どうしてママ達は私とアイに渡したの？」

「ママね、ラブママと一緒に相談したのよ。アイやマコトが14歳になった時にあなた達二人にプリキュアの力を渡す日を待っていたのよ。」

「プリキュアになるって事は世界を守らなきゃいけない使命と責任感を背負わなきゃいけないのよ。でも使命や責任感だけじゃなくてみんなを守りたいというその強い想いがあって最後まで戦えたのよ。」「ラブもせつなもプリキュアとして世界を守る強い使命と責任感を背負いながら戦って来た。また使命や責任以外にもみんなを守りたいというその強い気持ちも持ちながらプリキュアに変身して戦った。」

「プリキュアとして……。」

「あなた達二人もプリキュアになったら大変かもしれないけどママ達がちゃんといろいろ教えてあげるからね。」

「うん、あたしもママやなぎさん達みたいにプリキュアになれるんだね。」

「私とアイがプリキュアになって世界を守る……。」母達と同じプリキュアになれる事と、プリキュアになって世界を守る事でもあった。

「ママ、あたしママ達みたいにプリキュアになってみんなを守ってみせるよ。」

「私とアイがママみたいにプリキュアになる事はママと同じようにプリキュアになれるって事だね。」

「じゃあ二人とも受け取って。」二人にそれぞれのリンクルンを手渡し、またリンクルンを渡したと同時にプリキュアに必要な変身キー『ピックルン』、アイにはリルン、マコトにはミルンを渡した。

「ママ、早速変身してみるよ。」

「じゃあ変身するよ。」リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、アイとマコトの2人はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「これが、あたし達……。」プリキュアに変身した姿に驚く二人。

「あたしとせつなにそっくりよ。」

「アイとマコトが変身した姿って私とラブした変身した姿に似ているわ。」アイとマコトがプリキュアに変身した姿は、母が変身したキュアピーチ、キュアパッションにそれぞれ少し酷似していた。

「あたしがキュアピーチ?!」

「私がキュアパッション?!」母が変身していたプリキュアに酷似している事に驚いた二人。

「なんだか親がプリキュアだったから子がプリキュアに変身して、変身したのが昔のあたし達って……。」

「でも服装とかが少し違うわ。」

「でもプリキュアに変身できたんだからこれからはプリキュアとしてちゃんとやっていかないと。」

「そうよね、ママと同じプリキュアになれてよかったわ。」

「二人がプリキュアに変身できたのは良いけど……。」

「昔の私たちに似ているって言うのが……。」初めて、プリキュアに変身したアイとマコト。物語はまだ始まったばかり、これから先プリキュアとして待ち受ける数々の運命が立ちばかろうとし

ていた。

次回 2話へ続く

第2話 私たちの初めての戦い（前書き）

第二話は初めての戦闘とこの小説における敵キャラです。少し変わったところも少しあります。

第2話 私たちの初めての戦い

ラブとせつなの双子の娘アイとマコトが二人の母親と同じようにプリキュアに変身したが、まだ変身したばかりでプリキュアの名前が決まっておらず、戦闘経験もあらずプリキュアとしてはまだまだ・・・であった。

「キュアピーチがラブママだから、キュアブラックがなぎささんで、キュアメロディが響さんで・・・。」

「キュアパッションがせつなママだから、キュアホワイトがほのかさんで、キュアリズムが奏さんだから・・・。」二人は母やなぎさやほのか達はプリキュアに変身するとき名前をあげる事に対して二人はプリキュアに変身して名前をを何にするのか考えていた。

「二人ともどうしたの？」ラブとせつなの母親二人が近くにやって来た。

「実はね、私とアイがプリキュアに変身して名前をあげるのにいろいろ考えていたのよ。」

「ラブママとせつなママはプリキュアに変身した時にどうやってプリキュアの名前を言ったの？」

「うーん、ママも最初プリキュアに変身した時はプリキュアの名前は自分でもわからないわ。」

「みんな最初にプリキュアに変身した姿はいきなり名前をあげてたわ。」

「うーん、なんて言う名前でも名前決めてれば良いんだろう。」

「じゃあ、あたしはラブママのピーチから名前取るのかな。」

「私はせつなママ達のキュアパッションの名前を使っていこうかな。」

「じゃ、ママ達の名前から使う事は許さないわ。」

「いいじゃん、親子なんだからキュアピーチって名乗ってもいいじゃん。」

「同じ名前が二人もいるとママは困るわ。」

「変身姿が似そっくりはわかるけど、名前も同じだと少し困るわ。プリキュアである母二人から姿が似ていても生も同じになると同じ名前は一つにして欲しいと断られ、自分たちが変身するプリキュアの名前を二つも名乗られるとやっぱり困ると思い、却下を言い渡した。それからアイとマコトは外へ歩き回りながら未だに自分たちの変身するプリキュアの名前の事を未だに考えていた。

「そっちは名前決まった？」

「ぜんぜんよ。」

「ママったら別にママのプリキュアの名前を使っても良いのになんてダメなのかな？」

「プリキュアの子供なのに親の名前使っているのに。」そう愚痴を

言いながら歩いていく。二人が遠く離れた場所から一人の不審な人物がこの町に突如現れた。

「ここがミッドスターか、あのお方からまずはここを征服しろと言われた。この世界はどうやらまだ我々の存在に気付いていないそうだな。」不審な人物はこの世界を征服するために送られてきた事で、その人物からとてつもない邪気が漂っていた。

「この世界を征服してここを拠点としていく。」その頃、アイとマコトの二人はスーパーマーケットでそれぞれの果物を買って、おやつに食べていた。

「このリンゴおいしいわ。」赤くて綺麗なリンゴを手で持ちながら食べ歩くアイ。

「さくらんぼもおいしいわ。」小さくて可愛いさくらんぼを一つずつ食べるマコト。

「それにしてもプリキュアの名前適当に決めたほうがいいかな？」

「適当はダメよ、適当な名前使つとプリキュアが台無しになっちゃうから。」

「でも名前決めないと名無しのプリキュアって言う訳にもいかないから。」そう言いながら二人はプリキュアの名前を考えていた。二人は街角を通り越してすぐ近くにある公園へと入った。

「なんか公園に来ちゃったね。」

「公園にいくと少し落ち着くわ。」公園のベンチに座って二人は少

し気分を落ち着かせて、周りが賑やかな雰囲気を見ていた。

「公園でこうしているとみんな楽しく過ごしているわね。」

「小さい頃はラブママとせつなママによく連れてこられた事を思い出すわ。」

「公園でよく砂場で一緒に遊んだり、ブランコに乗ったりしていたわ。」幼い頃、二人の母親によく公園へ連れて行って一緒に遊んだ事を思い出す二人。母親との思い出を一番大事にし、母親の事を一番大好きである二人。公園に不審な人物が近くにやってきた。

「この世界の人間共は下らない毎日を過ごしているそうだな、実に下らん。まあいい挨拶代わりにこの世界の人間共に我がヘルエビルの力を思い知らせてくれる。」突如姿を変えて、赤い衣装の格好をして現れた。

「俺の名はガーレット、ヘルエビルの幹部の一人！！お前達に恐怖と地獄を味合わせてやる！！」その人物はガーレットと名乗り、謎の組織ヘルエビルの幹部の一人。服のポケットから不気味なカードを出して滑り台に投げつけた。

「出でよ、イライラー！！」カードに投げつけた滑り台は怪物イライラーにさせて、公園にいる人達に襲いかかった。

「イライラー！！」

「きゃあー！！」

「助けてー！！」滑り台イライラーから逃げていく人達・

「ん？」

「何か騒がしいわ？」急に人が騒いでいる声を聞いて近くへ駆けつけた。

「何あれ?!」公園で暴れているイライラーを初めて光景する二人。滑降部を鞭にして地面にたたきつける滑り台イライラー。

「イライラー!!」

「こつちに来るよ。」こつちに襲いかかってきて二人はそのままあわてて逃げはじめた。

「わあっ!!」後ろから足で踏んづけようとしてくる滑り台イライラーから走って逃げ回り、公園内を逃げ回り続けるアイとマコト。どこか隠れそうな場所を必死で見つけ出そうと滑り台イライラーから逃げ回る。

「どこか、隠れそうな場所ないのかな?!」

「ああー、もうどこにあるのー!!」走って走って逃げ回っても隠れるところが見つからなくて焦りだし、このままでは二人ともピンチに晒されてしまう危機に陥ってしまう。

「イライラー!!」

「はあ、はあ、はあー。」

「もうだめだわ、逃げ切ってためだわ。」

「ここで諦めちゃだめよ、まだあたし達にままからもらったプリキュアに変身する力があるのよ！」

「でも名前がまだ決まっていなくて……。」

「とにかくプリキュアに変身して戦う事が大事よ！二人で変身しようよ、マコト。」

「アイも一緒にママからもらったプリキュアの力をここで見せてあげないと。」ポケットからリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、アイとマコトの2人はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「イライラー！！！」

「ん、なんだあれは?!」ガレットは逃げ回っていた二人がプリキュアに変身した姿を目の当たりに光景した。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」プリキュアに変身したアイは自らキュアアップルと名乗った。

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」プリキュアに変身したマコトは自らキュアチェリーと名乗った。

「フレッシュプリキュア!!!」プリキュアに変身した二人は、プリ

キュアの名前を自分で名乗りを上げた。

「プリキュアの名前やっと決まったよ！」

「私もよ！」

「あたしの名前はキュアアップル」

「私はキュアチェリーよ。」それぞれ自分たちが決めた名前を言い、ようやくプリキュアの名前が決まって喜ぶ二人。

「プリキュアか、この世界にも現れるとは厄介な事だ。イライラー
！！」

「イライラー！！」滑り台イライラーは滑降部をプリキュアに向けて叩こうとした。バシッ！！！！

「ん？！」滑り台イライラーの滑降部を手で掴み、そのまま思いつきり勢いよく投げ飛ばそうとした。

「はあああッ！！」手で掴んだイライラーをそのまま投げ飛ばして、地面に思いっきりぶつけた。

「イライラーっ！！！」

「むっ！」プリキュアの力をみて驚愕し、今後の驚異となられる存在と感じ、ヘルエビルに大きな存在としてなられる事になった。地面から立ち上がった滑り台イライラーは今度は足で踏みつぶそうとした。

「アップル、来るわよ！」

「チェリー、かわすよ!!!」振り下ろしてくる足をジャンプしてかわして、空高く身体を華麗に舞ながら同時攻撃でお見舞いしようとした。

「行くよ、チェリー。」

「アップルも一緒に仕掛けるわ。」

「ダブルプリキュアキック!!!」滑り台イライラーに急降下しながら飛び蹴りを繰り返す。

「グオオオー!!!」二人の同時攻撃で倒れはじめるイライラー。

「今よ。」二人はそれぞれ頭上で両手を叩いてから、左右の腰元に手をおき、胸の前で両手を使ってハートの形を作った。

「悪いの悪いの飛んでいけ!!!」

「プリキュア・ラブハート！」

「プリキュア・ハピネスハート！」それぞれのプリキュアから放つハート型の光線がイライラーに向けた。

「イライ・・・スツキリー・・・。」プリキュアの放つ光線で敵は浄化され、元の滑り台に戻った。

「プリキュア、このことはあのお方に報告せねば!」一旦引き上げるガーレット。

「やった!!」

「初めての戦闘、楽勝だったわ。」プリキュアとして初めての戦闘は、苦戦もなくそのまま簡単に倒す事が出来た初戦であった。自宅に帰った二人は二人の母親と一緒に夕食を食べながら会話をした。

「公園に怪物が現れた?」

「あたしとマコトはプリキュアに変身してその怪物をやっつけたのよ。」公園で怪物が現れてアイとマコトがプリキュアに変身してその怪物をやっつけた事を聞かされたラブとせつな。

「ママやなぎさや咲やのぞみ達も最初は怪物が現れてそこに妖精が現れて初めてプリキュアに変身して戦ったのよ。」昔の事を思い出して自分も最初、怪物に遭遇してピンチになったときそこで初めてプリキュアに変身して怪物と戦ってきた。

「ママ、アイとマコトの二人がプリキュアになってママ達と同じように怪物と戦う事になるんだね。」

「ママももし二人がピンチの時になったら津でも駆けつけに来てあげるからね。ママ達もプリキュアの力は今でもあるのよ。」

「それと、ようやく私たちの変身するプリキュアの名前が決まったよ。」

「えっ、二人とも名前は決まったの?」

「名前はキュア何?」アイとマコトがようやく自分たちが変身する

プリキュアの名前が決まったと娘達がどんな名前のプリキュアか今から双子の娘から口に出して言おうとした。

「あたしはキュアアップル。」

「私はキュアチェリー。」アイからはキュアアップル、マコトからはキュアチェリーとそれぞれのプリキュアの名前をプリキュアである母ラブとせつなに紹介した。

「ママ達のプリキュアの名前に少し似ているわ。」

「姿も名前も似ているんなら親子でプリキュアはどうか？」

「二人のママと一緒に変身して戦うのもあたしは見たいな。」

「ウフフフ、ママのプリキュア姿はいつでも見せてあげるわ。」

「ママのプリキュア姿はとてビューティーかも？」

「ママがプリキュアに変身する姿今見せて。」

「写真で見ているのしかからラブママとせつなママの二人がプリキュアに変身して生で見るのも是非見せて。」アイとマコトの双子の娘から母親がプリキュアに変身した姿をどうしてもこの目で見たいと求められてきた。

「ダメ、今は変身しません。」

「今度変身するからそれまでに我慢してて。」

「ああ、もうママったらけち。」

「生で見たかったな。」アイとマコトがプリキュアとしての初めての戦い、そして謎の組織ヘルエビルが今後、どういう展開を巻き出すのか物語は始まったばかりであった。

次回 3話へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3410z/>

家族はプリキュア

2011年12月11日20時46分発行